

深究院―自ら歪みを生み出す人妻―

目次

第一話	同調
第二話	条件反射
第三話	無意識
第四話	定義
第五話	進化の兆し
第六話	飢餓の生成
第七話	自ら生み出す歪み
第八話	予測の乱れ
第九話	自ら生み出す次の歪み
第十話	予測不能の完成

第一話 同調

地下深く、深究院の観察室は冷たい空気に満ちていた。

厚い強化ガラスを挟んで、二つの部屋が向かい合っていた。

美咲と滯は、ガラス越しに顔を見合わせる形で跪かされていた。

二人の喉の位置に、それぞれ太く硬いデイルドが冷たく固定されている。

神木の声が、スピーカー越しに静かに落ちた。

3

「……同じ深さまで飲み込みながら、
自分自身の胸とクリトリスのピアスを触りなさい。
顔を見ながら、競うように。」

美咲は震える唇を開き、デイルドを咥え込んだ。
喉の奥が激しく拒否し、えずきが込み上げる。

大量の涎が溢れ、顎から胸の谷間までをぐしゃぐしゃに濡らした。

でも――

ほんの一瞬だけ、喉の奥がふっと緩んだ気がした。

デイルドが、わずかに、滯と同じ深さまで沈んだような感覚。

呼吸が、一瞬だけ、滯と重なった。

——次の瞬間、喉が強く締めまり、すべてを押し返した。

苦しさが残った。

美咲の目から、熱い涙がぼろぼろと零れ落ちる。

向こう側では、滯はまるで当然のように喉を滑らかに動かし、デイルドを根元まで飲み込んでいた。

4

その瞳は美咲をじっと見つめながら、自分の胸のピアスを強く捻り、

クリトリスのリングを指で引っ張り、腰を小さく前後に振り始めている。

美咲も必死に自分のピアスを弄った。

乳首を強く捻り、クリトリスを指で押し込む。

でも、喉はデイルドを拒み続け、身体は思うように動かない。

神木の声が響いた。

「……いい子だ、滯。」

その言葉が落ちた瞬間、

美咲の胸のピアスとクリトリスのピアスが、触れてもいないのに激しく熱くなった。

子宮の奥が疼き、腰が勝手に小さく跳ねる。

（どうして……あっちはできているのに……）

同じことをしているはずなのに、

滯は深く飲み込み、美咲は拒否される。

同じピアスを弄っているはずなのに、

滯は褒められ、美咲はただ見られているだけ。

涙と大量の涎で顔をぐちゃぐちゃにしながら、
美咲は喉をデイルドに必死に擦りつけ続けた。

追いつけない。

置いていかれる。